PRO MUSICA NIPPONIA

日本音楽集団
PRO MUSICA NIPPONIA

創立35周年記念

第156回定期演奏会

二十絃箏誕生30年

～21世紀へのプレリュード～

The 156th Regular Concert

企画・構成：吉村七重

1999年9月22日［水］午後7時開演 津田ホール

■主催
日本音楽集団
〒151-0073 東京都渋谷区笹塚3-17-1滝沢ビル302
TEL03-3378-4741 FAX03-3376-2033
ホームページ http://www.bekkoame.ne.jp/ro/promusica
E-Mail promusica@ro.bekkoame.ne.jp

■助成
文化庁・日本芸術文化振興会
舞台芸術振興事業 Arts Plan 21 芸術文化振興基金
Asahi アサヒビール芸術文化財団

一、 青（おう）の島 (1989年) 新実徳英作曲

Tokuhide Niimi : Oh-no-Shima

二十絃箏Ⅰ：桜井智永・城ケ崎美保・丸岡映美・久本桂子
二十絃箏Ⅱ：島崎春美・中垣雅葉・桐岡知代・徳野礼子

「青の島」とは沖縄諸島でのいわゆる「ニライカナイ」にも通じる音楽。

この曲では琉球旋法を核とし、二十絃箏の様々な奏法～爪をはずした指によるトレモロ、同じく指によるppのピチカート、押し放しや突きいろによりピッチを単に変化させるなど～を駆使し、それらが二面の箏の間に作り出す微妙な音程・音色・リズムのずれにより、「南の青」にも通じる暖みと活力のある音空間を作り出す。(初演プログラムより)

本日の演奏では8人の奏者により微妙な音程・リズムのずれをより複雑にして面白さを出し、音楽を立体的に構築してみたいと思った。 (吉村七重)

二、 箏譚詩集第4集『秋』より (1990年) 三木稔作曲

Minoru Miki : Ballades for Koto solo vol.Ⅳ

<案山子（かかし）考><渡る鳥><月が見た旅路>
二十絃箏独奏：山田明美

1968年のクリスマスイブに第1集『冬』第1曲<小さな序曲>によってさりげなく始められた旅路は、第2集『春』(1976)、第3集『夏』(1983) と続き、第4集『秋』で21年目の旅を終え、ここに何にも変え難い美しい四季が誕生した。

本日、ロビーコンサートで演奏される第3集『夏』に続き、季節は移り第4集『秋』より＜案山子考＞＜渡る鳥＞＜月が見た旅路＞の三曲を演奏する。田園を見つめる案山子、秋に飛来する鳥、あるいは南へ飛び立ってゆく鳥、中空に浮かぶ月が見つめるものは…、日本の秋の美しい風景を、二十絃箏の響きが彩る。

三、 コロス (1999年、委嘱・初演) 田村文生作曲

Fumio Tamura : Chorós(commissioned by PMN, world premiere)

笛：越智成人　篳篥：稲葉明徳 (客演)　尺八：三橋貴風
二十絃箏：熊沢栄利子・城ケ崎美保・嶋﨑光代・早川智子
指揮：田村文生

例えば理解不能な言語で作曲されたオペラを字幕無しで観る場合、言葉によって内容を理解するのは不可能である。その代わりに、身振、音楽、動きなど、様々な要素の関係でその内容の一部を理解するのであろうが、この作品はその状態とほとんど変わらないかも知れない。

私が作曲を始める時に、何よりも最初に考える「配置」は、楽器編成と同様、音楽の内容を決定する上で非常に重要である。「3人の管楽器奏者を取り囲む4面の箏」という、当然といえば当然のアイデアによって、実際に音符を書く前に、既に音楽の8割くらいが決定されたと思う。そしてその配置を直接言い表すタイトル「コロス (Chorós)」は、演劇用語としての意味そのものであり、主導する演者 (篠笛、篳篥、尺八) に従い、そのリスポンスとしての音楽を4面の箏が奏でる。勿論、舞台前面で演じられた音楽との関連付けは様々な意味においてなされるが、主演者としての「関係の度合い」を聴くというのがこの曲の目的で、音楽を聴くという行為の基本とも言える。 (田村文生)

休憩 ……

四、 箏四重奏曲「さすらい」(1998年) シモン・ベルトラン作曲

Simon Bertrand : Le quatuor des errances

二十絃箏Ⅰ：吉村七重　　二十絃箏Ⅱ：田村法子
二十絃箏Ⅲ：黒澤有美　　二十絃箏Ⅳ：山田明美

「さすらい」は本来1998年に出版社Paul Gerritsの委嘱により作曲された4本のギターのための作品を、4面の箏のために編曲したものである。

瞑想から激情へ、5つの短い楽章は流浪する情緒の回顧であり、そこではアジア的な5音音階や調性的響きを時折かもし出すような音列(しだいに音程関係の広くなる音列)が、旋律的あるいは和声的「身振り」となり、出現、消滅する。　(シモン・ベルトラン)

"le quatuor des errances" was written in 1998, commisioned by my publisher Paul Gerrits and originally written for four guitars, then arranged for four koto. It consists of apparitions and disapearences of various melodic and harmonic gestures, all using the same modal row, made from an gradual enlargement of intervals, which gives sometimes pentatonic asia-like sounds, or tonal sounds. The fives short movements are remembrances of different states of mind, from meditation to exaltation, felt during a long journey…

五、 五段の調べ (1979年) 三木稔作曲

Minoru Miki : Godan-no-Shirabe

二十絃箏独奏：宮越圭子

＜東から＞の第二部にあたる。第一部は、調絃が自由にできる箏の特性を利用し、ガムラン風の調絃と発想で作曲されている。移行部を経て、第二部は日本的音階で、古典的段物の構成を踏襲し、格段百四拍を持つ五段の調べとなっている。

東洋的民族音階に始めて挑戦した作品であり、平均律にとらわれることのない東からの力強い眼差しが感じられる。<五段の調べ>は、古典の手法を踏まえながらも、現代的視線から解釈された段物といえるだろう。

六、 夢あわせ・夢たがえ－二十絃箏とアンサンブルのために

(1998/9、邦楽器ヴァージョン改訂初演) 吉松隆作曲

Takashi Yoshimatsu : Within Dreams Without Dreams

二十絃箏独奏：吉村七重

笛：越智成人　　笙：三浦礼美 (客演)　　尺八：添川浩史・加藤秀和
箏：桜井智永　　十七絃：宮越圭子　　打楽器：臼杵美智代

二十絃を核にした<水・木・火・雲・空>という５つの夢の「夢の解題」。タイトルの「夢あわせ」は見た夢が吉か凶かを解読すること、そして「夢たがえ」は夢が凶夢だったとき夢あわせで吉夢に変えること。

1. 水の夢：二十絃による波の音型に笙、笛、尺八の旋律が重なってゆくアダージョ。
2. 木の夢：十三絃と十七絃が加わる木質の乾いた響きによる間奏曲風スケルツォ。
3. 火の夢：箏群の変拍子のオスティナートに全楽器が重なってゆくアレグロ。
4. 雲の夢：笙のロングトーンに二十絃のソロが静かに浮遊するアンダンテ。
5. 空の夢：協和音の大気の中に全楽器が穏やかに漂うフィナーレ。

1998年、吉村七重とウィーン・ゾリステン・トリオ(クラリネット、ヴァイオリン、チェロ)のために作曲。99年夏、二十絃と7人のアンサンブル(笙、笛、尺八2、十三絃、十七絃、打楽器)による邦楽器アンサンブル版として再編。op.47a。　(吉松隆)

作曲者プロフィール

▌新実徳英▐

1947年生まれ。東京芸大大学院修了。77年、ジュネーヴ国際バレエ音楽作曲コンクールでグランプリ、ジュネーヴ市長賞受賞。合唱から管弦楽曲まで幅広い分野で作品多数。「創造神の眼」では、94年度レコードアカデミー賞を受賞。今秋、サントリーホールにて作曲家の個展1999（サントリー音楽財団コンサート）を開催。

▌三木稔▐

創立以来20年間の日本音楽集団での活動を別として、＜春琴抄＞にはじまるオペラ作品群（7作目＜源氏物語＞が来年アメリカで初演)、＜鳳凰三連＞に代表される管弦楽曲、室内楽曲の多くが海外委嘱で上演も頻繁。歌曲・合唱曲も多い。著書「日本楽器法」。芸術祭大賞・ジローオペラ賞・紫綬褒章など受章。オーケストラアジア芸術監督。

▌田村文生▐

東京芸術大学大学院およびギルドホール音楽院大学院、ロンドン大学大学院修了。Vallentino Bucchi国際作曲コンクール、舞台芸術創作奨励特別賞、国立劇場作曲コンクール等に入選、入賞。日本音楽集団のほか、日本音楽集団作曲家協議会、日本電子音楽協会、作曲家グループTEMPUS NOVUM, Ensemble Contemporary α のメンバーとして活動している。

▌シモン・ベルトラン▐

1969年生まれ。作曲家、サキソホーン奏者。モントリオール大学・コンセルヴァトワール・セヴラン卒業。1994年セヴラン作曲部門一位。1998年ケベック・カウンシル派遣により来日。1999年2月に在日カナダ大使館において自作によるコンサート開催。

▌吉松隆▐

1953年東京生まれ。慶應義塾大学工学部中退。「現代音楽」の非音楽的な傾向に反発した「世紀末抒情主義」を主唱し、数々の作品を発表。現在、英国CHANDOSレコードで全オーケストラ作品のCD化が進行中。評論・エッセイなど執筆活動も行っている。

客演者プロフィール

▌稲葉明徳▐

9歳より篳篥を始め、12歳より宮内庁の東儀兼彦氏に師事する。19歳より東京楽所に所属。以来、故多忠麿氏の下、国内外での演奏やCDレコーディング、現代音楽作曲家の公演他、テレビ、CM等でも活躍している。

▌三浦礼美▐

国立音楽大学卒。在学中に雅楽、笙と出会い、卒業後、演奏団体「伶楽舎」に入会。リンカーンセンターフェスティバル(96年)始め、毎年の海外公演に出演している。

ご挨拶

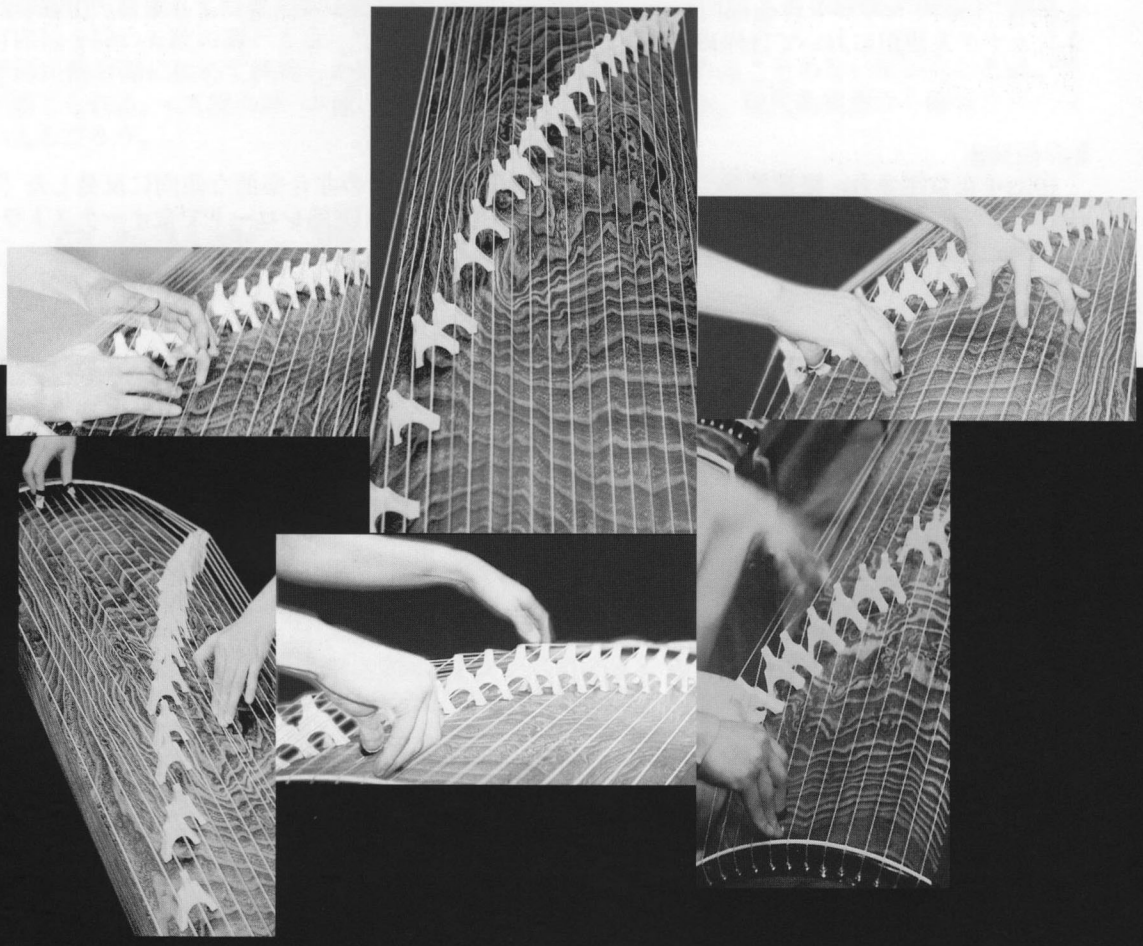
日本音楽集団は今年35周年を迎えました。
邦楽器と一口にいってもそれぞれの存在は、生い立ち、歴史、習慣、音楽性等が全く違う世界に属しています。そしてそこに集まった個性豊かな人達。この2つの要素が相俟って音楽集団をこのように長続きさせている面白さなのでしょう。

その中で、最も若い人が多く人数も多いのが本日の主役の<箏族>であり、みな二十絃箏を自然に弾いています。つい10年前と比べると二十絃箏は様々な場所で色々な人に気軽に使われる様になり、今後ますますその勢いは加速していくのだろうと思います。

今日のコンサートでは、第一世代作曲家<三木稔>、第二世代<新実徳英、吉松隆>、第三世代<田村文生、シモン・ベルトラン>の作品を16人の箏奏者により演奏いたします。

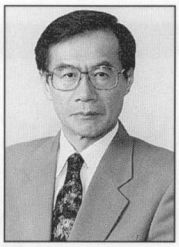
ロビーでの一番若い世代の５人の演奏も含めまして、お楽しみいただき、二十絃箏の将来を感じて頂ければ企画者としてこんなにうれしいことはありません。

吉村七重



二十絃箏の展開

山川直治



絃数はさまざまながら、長胴のツィター族である箏・琴類は東アジアに広く分布している。箏にはその構造、機能による特徴的な奏法、手法（身体運動性）とあいまって、絃振動が喚起する源初の驚きより、遥かな時空を通過し幾重もの固有の記憶が内蔵されている。二十絃箏にもそれが遺伝している。「琴柱に膠す」（史記）という諺があるが、箏は柱が可動ゆえに、現代にいたるまで、実にいろいろな調絃が生まれ、箏の音楽を多彩にしてきた。

二十絃箏は1969年に、当時日本音楽集団メンバーの箏演奏家野坂恵子氏が作曲家三木稔氏の協力を得て開発した楽器である（その後零絃が加えられ二十一絃となっている）。時あたかもいわゆる「現代邦楽」が上昇気流にあり、集団は結成より５年目を数え、草創期のエネルギーが漲っていた。現代の表現者として、伝統的な十三絃箏にまとわりついた不合理な枠を乗り越え、「より感動を起しうる演奏のため…より広範な運動性や表現能力を持った箏」（三木稔）の出現が希求され、十三絃の長所を保存しつつ音域、音量が拡大された。二十絃箏は伝統と現代の対峙による真摯な批判と挑戦の所産である。宮城道雄考案の十七絃が近代邦楽合奏のため、低音補助楽器として登場したのとは、自ずから位相を異にしている。しかし、その十七絃も今や、十七絃に情熱を注いだ演奏家達の努力により独奏楽器としても定着した。なお、中国の箏は現在、金属絃の二十一絃がポピュラーとなっているそうだ。

私は1983年より国立劇場の「現代日本音楽の展開」公演を企画制作し、二十絃箏を含む合奏作品もいくつか取り上げたが、独奏曲としては87年の「箏曲の軌跡」で三木稔作曲『華やぎ』、96年には西村朗作曲『七重』を選び、吉村七重さんに出演依頼した。二十絃箏ならではの高度な技法、豊かな響き、瑞々しいダイナミズムが横溢し、また発想の広がりを示した。かくして創始者の後を継ぐ若き二十絃奏者達も、国際的視野のもとに自らの創造の地盤を問いつつ活動する同世代の作曲家達と、深くコミュニケーションを図りながら、あるいはジャンルを異にする気鋭の実演家達と積極的に共演しながら、さらに表現領域を開拓してきた。我々聴衆もしばしば彼等の巻き起こす渦中にあって、結晶度の高い作品と演奏に出会う喜びを得た。

国立劇場は98年より、日本の伝統楽器及び発声法を主体とした作曲コンクールを発足させた。多絃箏も伝統楽器の延長にあるものとして認められたが、二十絃箏を使った作品がいくつか上位にあった。二十絃箏が現代の音楽創造の場で、確実に地歩を占めた証である。生まれて30年、主に日本音楽集団メンバーの活動とともに、世界を舞台に華々しく弾奏されてきた新楽器だが、しかし楽器としてさらに普遍性を持つためには、より多方面で若手演奏家が輩出することと、ひろく人々の心をとらえる作品が供給され続けることが肝要なのは言うまでもない。吉村さんらはそのことを既に深く自覚して行動している。

（日本音楽研究・恵泉女学園大学非常勤講師）

ロビー・コンサート・プログラム

（午後6時25分より）

箏譚詩集第3集『夏』　三木稔作曲

一、露一つ	中垣雅葉
二、南へ	黒澤有美
三、サヌールの舞姫	田村法子
四、白い風の下で	久本桂子
五、雨ざんざん	嶋﨑光代